Japan Society of Obstetrics and Gynecology

P1-8-5 当院における子宮体部漿液性腺癌の後方視的検討

宮崎県立宮崎病院
林 広典，栗原秀一，中武優理，高村一紘，中原一成，田中章子，佐藤麻衣，安永昌史，谷口秀一，嶋本富博

子宮体部漿液性腺癌はtype2の子宮体癌で，子宮体癌全体の約3%を占める．高齢者に多く予後不良で，本邦で症例数が増加しており標準治療の確立が求められている．2000年から2013年までに当院で診断，治療した子宮体部漿液性腺癌29症例について後方視的に検討した．年齢は49-91歳（中央値66歳），進行期別内訳は1期10例（1a期5例，1b期5例），2期1例，3期13例(3a期2例，3b期1例，3c期10例)，4b期6例であった．Kaplan-Meier法による累積5年生存率は60.5%であった．臨床進行期別での累積5年生存率は1期100%，3期27.3%，4期20.0%であった．26症例で手術療法(腹式単純子宮全摘出術または準広汎子宮全摘出術＋両側付属器摘出術が5例，上記に加え骨盤リンパ節郭清術が15例，上記に加え大網切除が6例）を施行され，22症例で化学療法（術前化学療法5例，術後化学療法17例，すべて第一選択はパクリタキセル，カルボプラチン併用療法），4症例で放射線療法（術前照射1例，術後照射3例）を施行された．再発した3期の8症例のうち6症例がリンパ節病変として，2症例は腹膜播種病変として再発した．当院での症例からも既出の報告と同様に漿液性腺癌では類内膜腺癌に比べ早期から子宮外へ進展し進行した症例が多く，進行症例では予後が不良であることが示された．また29症例中25症例で子宮内膜細胞診が施行され，24症例で陽性，1症例で擬陽性の結果であり，18症例で漿液性腺癌の診断を推定することができた．採取方法は25症例中3症例が直接塗抹法，22症例で液状検体細胞診（Liquid-based cytology（LBC法））が用いられた．直接塗抹法では3症例中1症例，LBC法では22症例中17症例で漿液性腺癌の診断を推定することができた．

P1-8-6 MRI検査では診断が困難であったが，PET-CT検査が有効であった子宮筋層内漿液性腺癌の一例

阿南共栄病院
國見幸太郎，佐藤美紀，和泉佳彦

今回は我々は，子宮筋層内に発生した子宮体癌の診断にPET-CT検査が有用であったので報告する．72歳G2P2．健診での胸部Xpにて胸膜異常を指摘され精査目的で来院．CA19-9高値(66.95U/ml)認め，腹部CT施行したところ子宮に嚢胞性変化を認めた．エコーにて子宮筋層内に最大3cmの嚢胞を複数認めた．子宮内膜は薄く，子宮頸部細胞診，子宮体部細胞診は異常認めなかった．MRI検査でT1，T2で高信号，分葉状・多房性嚢胞性腫瘤を認めたが，充実部分認められず経過観察とされた．その後，腫瘍マーカー上昇傾向にあったため，子宮体癌を疑いPET-CT検査施行．腸骨領域から傍大動脈領域，子宮体部腫瘍の辺縁の一部に一致してFDG高集積を認めた．単純子宮全摘，両側付属器摘出，後腹膜リンパ節郭清，大網切除を行った．術後病理診断は子宮体癌IIIc，serous papillary adenocartinomaであった．腫瘍と子宮内膜，漿膜との連続性は認められず，リンパ管侵襲が目立った．子宮筋層内に独立して発生した悪性腫瘍は不正出血などの症状が乏しく，また子宮内膜細胞診での陽性率も低く，診断が困難なことが多い．そのためスクリーニングによる早期発見は難しい．今回，子宮筋層内に局在する悪性腫瘍の診断にはMRI検査に加え，PET-CT検査を追加することが有用であると考えられた．

P1-8-7 子宮体部漿液性腺癌の臨床・病理学的検討

東京医大
石川貴久，寺内文敏，小野理貴，寺田秀昭，大村涼子，小島淳哉，在津令子，中山大栄，森竹哲也，佐川泰一，井坂惠一

【目的】子宮体癌の約90%は類内膜腺癌であり，残りが特殊組織型として分類される非類内膜腺癌である．今回，当科にて経験した非類内膜腺癌である漿液性腺癌症例を臨床・病理学的な両側面から検討した．【方法】2007年9月1日から2014年3月31日までの7年間に当科にて精査・加療を行った子宮体部漿液性腺癌例を対象に臨床・病理学的事項に関して検討を行った．基本的に開腹手術は卵巣癌に準じて行い，術後，FIGO 2008にてIb期以上はタキサン＋プラチナ製剤による化学療法を施行した．当科で経験した子宮体部腫瘍を，類内膜腺癌・肉腫・非類内膜腺癌に分類した．更に，非類内膜腺癌を，漿液性腺癌・明細胞腺癌・粘液性腺癌・扁平上皮癌・混合癌・未分化癌・神経内分泌細胞癌に細分化した．【成績】子宮体部腫瘍は268例，そのうち類内膜腺癌199例（74%），肉腫は24例（9%），非類内膜腺癌46例（17%）であった．非類内膜腺癌の内訳は，漿液性腺癌15例(32.6%，全体5.6%)，明細胞腺癌4例(8.7%，全体1.5%)，粘液性腺癌5例(10.1%，全体1.9%)，その他17例（40.0%，全体6.3%）であった．当施設では漿液性腺癌の年齢中央値が58±25歳，臨床進行期はI期が9例，II期が0例，III期が4例，IV期が2例であった．免疫組織学的に検討を加えたところ，全例でp53（＋），80%でER（＋），50%でPR（＋）であった．臨床進行期との明らかな相関は認めなかった．3期以上の手術において3例（50.0%）が残存腫瘍なしの完全摘出であった．【結論】子宮体部漿液性腺癌は予後不良例が多いとされるが，当科では特に3期，4期の症例でも3年生存率で83%である．十分な腫瘍減量と化学療法を行うことで，予後の改善が可能となる可能性が示された．

NII-Electronic Library Service